

転移する記憶

岡 真理

内容理解

この文章で筆者は、歴史を語るることについて考察し、日米のフィリピンでの戦いで起きた出来事でその考察を確かめようとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

〈出来事〉の記憶

・歴史の言説を構成するのは、〈出来事〉を¹していない者たちなのだから、彼らに〈出来事〉の記憶が分有されなければならない。

・〈出来事〉の記憶が他者に分有されるためには、〈出来事〉の外部に生きる²へ至る回路をつくり出し、それが語られなければならない。

・けれども、〈出来事〉が言葉で表現されると、必ずこぼれ落ちる〈出来事〉の³があり、〈出来事〉を現在形で生きる者たちは、〈出来事〉を語る言葉を持てない。

・だからこそ、〈出来事〉の記憶、語りえない〈出来事〉は、他者によって語られなければならない。

・〈出来事〉が、他者による表象の⁴にさらされ、他者によって一方的に位置付けられ、語られてきたということがある。ただし、当事者の言葉で、当事者しか知らない真実が開示されるというだけでは、〈出来事〉の記憶の⁵は実現しない。虐殺という〈出来事〉なら、それを体験した者、すなわち死者は、それについて証言できない。

語りえない者たちに代わって語ろうとする私たちが、語りえない〈出来事〉について語ることは、〈出来事〉のその語りえなさこそを証すものでなくてはならない。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

忘却（二八六・六）

媒介（二八六・七、一九一・七）

過剰（二八七・一）

拝聴（二八八・一）

他者による〈出来事〉の分有

・〈出来事〉の暴力を現在形でなお生きる者たち、または死者たちは、〈出来事〉を領有することはできない。〈出来事〉が彼らを領有している。そのような〈出来事〉を表象する物語は、〈出来事〉が人を⁶ するということそのことを、他者と分有できるものでなければならぬ。

『死者たちの声』（大岡昇平『レイテ戦記』を題材に、日米の兵士、島の住民の証言で作るドキュメンタリー）

・レイテ島リモン峠の決戦で、⁷ する日本兵の一人が、「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」と叫んだと、アメリカの元大尉が証言している。

・突撃に際し日本兵が次々に⁸ を叫んだのは、それが「突撃」であることを敵兵に理解させ、動揺をもたらそうとしたためであったと、元日本兵が証言している。

・なぜベイブ・ルースなのか。合理的説明のつかないその言葉とともに、その峠で一人の日本兵が不条理にも死のうとしていた、その出来事の記憶が、私たちに⁹ する。

「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」というその言葉は、〈出来事〉の過剰としての表象不能な〈出来事〉の存在を指し示しながら、〈出来事〉の¹⁰ を他者へと転移させていく。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。
〈指定語〉—— 記憶・当事者・突撃

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・戦前の日本とアメリカの野球交流はどのようなものであったか。

・戦争を語り伝える活動にどのようなものがあるか。

・戦争を題材とした映像作品にどのようなものがあるか。

100